

8月7日（火曜日）

○ 開会式（9時50分～10時00分） 研究会会長挨拶、大会オリエンテーション

【10:00～11:40】

A-1 「聴覚障害児の評価と指導」

東京学芸大学 濱田 豊彦

聴覚障害の一番の特徴は、目に見えないと言うことです。その困難に敏感であることが聴覚障害児の指導では求められます。この講義の中では、オーディオグラムの見方などの基礎知識に加え、聴覚障害児がどのようなことで本当に困るのか、悩んでいるのかに気づくことのできる目を養いたいと思います。そして、そこでの対応方法について話したいと思います。

B-1 「言語発達遅滞の指導の実際」

東京学芸大学 大伴 潔

本講座では、「語彙を育てる」「文を構成する」「文章で表現する（談話）」「効果的に伝える」といった各言語領域の発達過程を概観しながら、適切な指導目標の立案と、興味を持たせる課題を通じた指導について考えていきます。言語検査の例として「LCスケール」を取り上げ目標設定のあり方を考えるとともに、支援ニーズの高まりをみせる文字指導の効果的なアプローチについても検討します。

C-1 「子どもを見る目・育てる心」

東京学芸大学名誉教授 谷 俊治

言語障害児を前にして、先ず必要なことは子どもの問題を発見し理解することです。そのためには、診断という作業的、思考的プロセスのなかで、子どもの問題を見立てていかなければなりません。診断によって子どものことばの問題の素因、維持因、促進因などを探り出し、どのような考え方や方法で指導をすすめていったらよいかについて、事例をもとにして解説します。

【12:50～14:30】

A-2 「言語発達遅滞の評価と指導」

東京学芸大学 藤野 博

言語発達遅滞には、知的障害や自閉症スペクトラムを背景とする場合や、音声言語のみに顕著な問題を示す特異的言語発達障害(SLI)などいくつかのタイプがあります。本講義では「聞く・話す」ことに困難を抱えるタイプのLDの基本障害として近年注目されている特異的言語発達障害と、自閉症スペクトラムにおける会話やコミュニケーションの問題に焦点を当て、評価と指導のポイントを概説します。

B-2 「吃音児の指導の実際」

金沢大学 小林 宏明

ことばの教室で吃音がある児童・生徒の指導や支援を行う際には、教育的な視点に立つと共に、言語症状、心理的問題、社会的問題等の吃音をとりまく様々な問題に対して包括的にアプローチしていくことが求められます。本講座では、吃音がある児童・生徒の抱えるこれらの諸問題の概略や、それらの指導・支援方法について、具体的な事例を取り上げながら、会場の皆さんと考えていきたいと思ひます。

C-2 「事例検討の意義と進め方」

目白大学 羽田 紘一

言語障害児の教育的診断・指導を効果的に行うには、子ども理解や指導過程を検証しながら進める必要があります。”事例検討”は、その検証方法の一つとして有効であるといわれています。なぜ有効なのか、どのような方法があるのか、教育におけるPDCA〔計画(plan)、実行(do)、評価(check)、改善(act)〕サイクルとの関連などを、参加者の体験も踏まえて考えていきます。

【14:55～16:35】

A-3 「吃音の評価と指導」

東京学芸大学 伊藤 友彦

吃音症状をもつ子どもたちが豊かな学校生活をおくるためには、教師、保護者をはじめ、周囲の人々が吃音について可能な限り正確な知識をもっていることが必要です。この講義では、脳研究、言語処理モデル、言語発達研究からの最新の知見を中心に、吃音の基礎知識と研究成果をわかりやすく紹介し、最後に、これらの研究成果をふまえた言語臨床のありかたについて述べます。

B-3 「聴覚障害児の指導の実際」

元千葉県立養護学校流山高等学園 井上 皓太郎

聴覚障害児の「聞く力」を養うためにはどうしたらよいか。「聴覚活用学習」の内容と方法について述べます。聴力検査の内容と方法、結果の考察、「聞く力」と「言語学習能力」の関連、指導方法の手順と留意点、教材・教具の工夫などについて、「実践例」を踏まえながら説明します。お手持ちの指導計画、オーディオグラム、教材・教具、指導記録などをご持参いただければ参考になると思ひます。

C-3 「読み書き障害のある子への支援」

東京学芸大学 小池 敏英

読み書き障害のある子の指導においては、アセスメントに基づく指導が大切です。特に認知の偏りに配慮した教材を作成することが必要です。本講座では、ひらがなの読み困難、漢字の読み困難、漢字の書き困難の指導における教材作成と指導の実際について、論じます。漢字の指導では、特に読み指導と書字指導を合わせて行うことが必要で、この点での指導の工夫についても言及していきます。

8月8日(水曜日)

【9:15~10:55】

A-4「構音障害児の評価と指導」

上智大学 平井 沢子

構音障害をもつ子どもの評価と指導についてお話します。小学校入学後も構音の誤りが続き、なかなか治らない子どもに対して、どのようにアプローチしていったらよいかを事例を通して考えます。子どもの誤る音や誤り方の他、学習や行動の様子などから、構音障害がなぜ起きているのか、どうして治りにくいのかを考え、指導を進める上で枠組みとなる評価のポイントについて整理していきます。

B-4「側音化構音・口蓋化構音の指導Ⅰ～歪み音の理解と聞き取り」

昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科 山下 夕香里

側音化構音や口蓋化構音の子どもの評価法についてお話ししたいと思います。これらの音は歪み音なので慣れていないと聞き取りが難しく、現場で悩まれる先生方が多くいらっしゃいます。いろいろな子どもの発音時の舌の動きをVTRにて紹介しながら聞き取りのポイントや、これらの構音障害のとらえ方について紹介します。

C-4「検査法の活用について」

國學院大学幼児教育専門学校 石川 清明

コミュニケーションに障がいのある子どもの教育的診断や指導を進める際に、用いられている標準検査の中から代表的な検査を取り上げます。どの様な検査を選択したらよいか、検査の進め方、実施上の留意点、得られた検査結果から何を読み取るか、どのように解釈することができるか、検査結果を日々の指導にどのように応用するかなど「検査法の活用」について事例を紹介しながら理解を深めます。

【11:20~13:00】

A-5「発達障害児の個別指導計画」

東京学芸大学 橋本 創一

発達障害児の心理・行動特性を概説し、気づき・発見(スクリーニング)から相談・把握(アセスメント)、具体的な対応・教育支援を具現化する個別の指導計画の立案について講義します。特に、①学習と行動のアセスメント方法、②専門機関との連携、③具体的な支援方法(コミュニケーション、学習、行動・情緒への個別指導など)、④学級適応への支援、について考えていきます。

B-5「側音化構音・口蓋化構音の指導Ⅱ～舌を平らにする方法」

昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科 山下 夕香里

側音化構音や口蓋化構音のお子さんの舌は、発音時に奥がもりあがったり、細長く緊張したりします。そのために舌を平らにすること、舌の筋力やコントロールを高める指導が重要です。お口の体操の指導をさらに進めた舌のトレーニング法についてお話ししたいと思います。実際に体験していただきたいので、鏡、舌圧子、ストロー、ペンライトなどをご用意ください。

C-5「障害幼児の指導について」

國學院大学幼児教育専門学校 野本 茂夫

ことばの獲得が急速に進む幼児期は、障害のある幼児にとって、ことばの問題が特に顕著に表れやすい時期であり、ことばの指導にとっても大変重要な時期になります。障害幼児の相談でどのような指導をしたらよいか、具体的な幼児の発達や生活状況を理解しながら、幼児期のことばの発達を促すひとり一人の障害幼児にふさわしい指導のあり方の実際について、ビデオ映像を交えながら講義を進めます。

記念講演 【14:10~16:10】

講師 山崎 晃資(目白大学人間学部子ども学科教授)

演題 「“いわゆる”軽度発達障害の子どもの診断と指導」

“いわゆる”軽度発達障害には、①明確な規定がなく、②IQが正常範囲内にある発達障害であり、③日常生活における困難さや、周囲の無理解・誤解は想像以上であり、④幼児期および児童期に気付かれることが少なく、反社会的行動・衝動性などがあらわになってから過度に問題視され、⑤いじめの対象になりやすいなどの複雑な問題があります。「軽度」という言葉に惑わされずに、子どもの自尊感情を十分に念頭に置いた適切な対応をすべく努めることが大切です。

講師略歴

北海道生まれ。北海道大学大学院修了後、北海道大学医学部精神科(昭和40年の頃、自閉症児と関わる)、市立札幌病院清療院児童部長、東海大学医学部教授を経て、東海大学付属中高校長に。現在、目白大学人間学部教授。児童精神科医。専門は、児童青年心理学、乳幼児精神医学、発達障害児学。(2005.発達障害と子どもたち。講談社より)